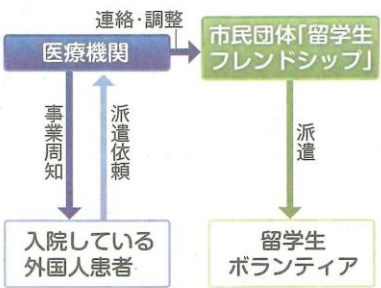




救急搬送のエリアを多言語化した製鉄記念室蘭病院

外国人入院患者への、留学生によるボランティア支援の事業案



# 増える外国人患者 受け入れ体制整備

胆振管内への外国人観光客数が増える中、室蘭市内の病院では外国人患者の受け入れも増え、外国人が安心して旅行できる医療体制の整備が急務となっている。市内の病院では受け付け時などの多言語化が進み、道も留学生に有償ボランティアとして支援してもらう事業を年度内に管内で始める。だが診察時での通訳導入はまだ先で、外国人への医療対応は緒に就いたばかりだ。

(須田幹生)

## 室蘭の病院 診療説明書を多言語化 室工大留学生が入院の付き添いも

6月下旬、市内の製鉄記念室蘭病院の救急受付前。市内に住む米国人の外国語指導助手スーン・コリンさん(27)は不慣れた表情でスマートフォンをしながら妻の病状を説明していた。妻ダイアナさん(23)が数日前から発熱し、脇や腹部の痛みが引かないため、夫は虫垂炎を心配して付き添って来院していた。

受診前に渡される診療説明書と同意書の英語版を見て「とても分かりやすい」と表情を少し緩めたが、2人は再び心配そうな表情に戻り診察室へ向かった。

胆振管内を訪れる観光客は増加の一途をたどる。胆振総合振興局によると、2016年度の観光客数は前年度比0・7%増の1709万人で5年連続で増えた。管内の5医療機関を対象にした振興局のアンケートによると、外国人

患者受け入れは14年度180人、15年度242人に上った。同病院は6月上旬、救急搬送時に通じるエリアの多言語化を始めた。救急玄関、院内の案内表示に加え診療説明書や同意書も英中韓の3カ国語を併記した。

診療説明書は検査内容、宗教的制約の申告などが書かれ、治療の概要が分かるようになっていて、同病院は「あくまで当院は地域のための病院。積極的には難しいが、人命尊重の観点から外国人の急患を受け入れる態勢を整えた」という。

ただし外国人への医療対応は入り口に立ったばかりだ。20年東京五輪・パラリンピックに向け、日本医師会や大会組織委、都庁なども昨年3月から、来日外国人への医療対応を話し合う会合を設けているが、方針はまだ決まっていない。

外国人患者の受け入れを巡り、言語や文化、医療制度の違いで問題が起きることもある。先のアンケートでは「外国語での説明に時間がかかり、病状の説明が正確に伝わっているか不安」「必要な診療内容を納得してもらえず、治療行為の拒否や強引に帰国を希望する場合もある」「保険会社と連絡が取れないため保険で認められる診療が確認できず、精算できないため帰国のめどがつかなかった」などの声が上がっていた。

一方、道は本年度、モデル事業として留学生に協力してもらう試み始める。室蘭工業大の留学生約70人が参加する室蘭の市民団体「留学生フレンドシップ」(日采均代表)が協力し、医療機関の仲介で留学生を派遣する。4時間6千〜7千円で、英中韓仏の4カ国語に対応する。

派遣された留学生は入院中の付き添いや生活用品の買い出し、本国との連絡などを担う。道内でも後志管内倶知安町の病院で導入されている診断時の通訳も検討されたが、専門性の高い医療用語を伝えるのが難しく、責任問題に発展しかねないため見送られた。

日采代表は「今回は観光客が安心して医療を受ける第一歩。今後は医療用語を通訳する仕組みも設けて、受診時に通訳できる道を模索したい」と話す。